

卒園児が小学校生活をスムーズにスタートするために必要な基礎的・汎用的能力の育成 —本園が考える年長にふさわしいキャリア教育を通して—

浜松市立小松幼稚園 園長 岩 瀬 隆 伸

1 主題設定の理由

現行(平成29年3月告示)の幼稚園教育要領(以下、「要領」)にキャリア教育に関する記載はない。しかし、令和5年6月16日に閣議決定された「第4期教育振興基本計画」の「キャリア教育・職業教育の充実」(p.38)に、「幼児教育から高等教育まで各学校段階を通じた体系的・系統的なキャリア教育を推進する。」と示された。

キャリア教育は、基礎的・汎用的能力(人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力)を育む教育である。すでに、小学校から高等学校までは、現行の学習指導要領に位置付けられており、取組が始まっている。

基礎的・汎用的能力は、読み書き、計算など、数値によって計られる認知能力ではなく、優しさや思考力などの非認知能力である。認知能力は、今後AIで補うことができると思われるが、非認知能力を補うことは難しい。国がキャリア教育を幼児教育から体系的・系統的に推進することを謳っているのは、変化の激しい今の時代を生き抜く上で基礎的・汎用的能力が不可欠であり、子供の実態に応じて長い時間を掛けて、ゆっくりと育てていくべきものであると押さえているからであろう。とりわけ、「要領」に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に含まれる資質・能力が、非認知能力であることから、幼児期も、基礎的・汎用的能力を育むのに、適した時期であると考えられる。

以上のことから、「要領」との整合性を図りながら本園が考える年長にふさわしいキャリア教育を通して子供の基礎的・汎用的能力を育む研究に取り組む。

2 研究仮説

年長にふさわしいキャリア教育を展開することで、子供の基礎的・汎用的能力が育まれ、小学校入学後の生活をスムーズにスタートすることができるであろう。

3 研究実践

(1) 年長にふさわしいキャリア教育の押さえ

直接的な体験の中から生まれた子供の願いや問いを、子供が実現したり、解決したりするために試行錯誤

誤する中で、基礎的・汎用的能力を育む教育。

(2) キャリア教育を展開する上での押さえ

園目標(「生涯にわたって豊かに生きていくための基礎となる力を育む」)の具現に向けた目指す子供の姿「げんき いっぱい」(諦めずに最後まで頑張る子など)「やさしさ いっぱい」(相手の気持ちを考えられる子など)「くふう いっぱい」(問いを解決するために考える子など)(以下、「3つの合言葉」と、基礎的・汎用的能力との関係を資料1のように整理した。

資料1 「3つの合言葉」と基礎的・汎用的能力との関係>

3つの合言葉	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
げんき いっぱい		○		○
やさしさ いっぱい	○	○		
くふう いっぱい	○		○	

上の表は、例えば、「げんき いっぱい」ならば、自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力を育む合言葉であることを示している。これは、「3つの合言葉」で目指す子供の姿が基礎的・汎用的能力を含んでいること、また、「3つの合言葉」に置き換えて子供に示すことで、子供がそれを通して、基礎的・汎用的能力を自覚することができるようにするためである。

また、キャリア教育を通して、どのような力を、主にどの場面で育むかを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、資料2のように整理した。

資料2 キャリア教育を通して育む力とそれを育む主な場面

〈人間関係形成・社会形成能力〉 ・言葉による伝え合いを楽しむ力 ・地域に親しみをもつ力 ※主に、話合いの場面や地域の方と触れ合う場面で育まれる。	
〈自己理解・自己管理能力〉 ・自分のことを自分でする力 ・友達と折り合いをつける力 ※主に、自分の仕事に取り組む場面や友達と関わる場面で育まれる。	
〈課題対応能力〉 ・自ら考え、判断する力 ・新しい考えを生み出す力 ※主に、問いを解決するために試行錯誤する場面で育まれる。	
〈キャリアプランニング能力〉 ・諦めずにやり遂げる力 ・自信をもって行動する力 ※主に、繰り返し活動する場面や振り返りの場面で育まれる。	

この他に、令和5年度(年長児24人)と令和6年度(年長児14人)は、キャリア教育を展開する活動を、「年間を通した野菜の栽培」と「夏野菜の栽培」、「収穫した野菜を販売するお店屋さん」の3つに絞ること

とした。それは、これら3つの活動は、子供の関心が高く活動の幅も広いため、願いや問いが生まれやすく、その実現や解決に向け、子供が試行錯誤する中で、基礎的・汎用的能力を育むことができると押さえたからである。ただ、そのためには、十分な時間の確保が必要となる。そこで園での活動の中から、これら3つの活動に絞ってキャリア教育を展開することとした。

また、活動の振り返り時に、保育室に掲示している「3つの合言葉」のイラスト（資料3）を子供たちに提示し、「3つの合言葉」につなげた基礎的・汎用的能力に関する話と「活動を通して育まれた力が小学校での学習や生活で役立つ話」（以下、「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」）を繰り返し行い、子供たちが「小学校生活への自信」をもつことができるようにすることを押さえた。

そして、これらの押さえを基に、キャリア教育を位置付けたグランドデザインやキャリア教育全体計画等を作成し、職員の本研究に関する共通理解を図った。

(3) 「年間を通した野菜の栽培」での実践

令和4年度までは、種や苗植えと水やり、収穫の3つを子供たちが担い、他の作業は職員が行っていた。しかし、これでは栽培へのかかわりが乏しく、基礎的・汎用的能力を育むための環境構成と援助を、十分に講ずることができないと考えた。そこで、令和5年度から徐々に畑の作付面積を約2倍（約120㎡）に広げるとともに、子供たちの仕事に、畑の石拾い、間引き、害虫駆除（写真1）、草取り、試し掘りの5つを加えた。それにより子供たちの野菜の栽培に対する興味・関心が高まり、栽培の仕事に熱心に取り組むようになっていった（自己理解・自己管理能力）。その結果、資料4の通り、園で食べたり持ち帰ったりしても、かなりの野菜が余る収穫数となった。また、年間を通して野菜を栽培する過程や収穫後の振り返りの中で、教師が繰り返し「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」をしたり、積極的に活動する子供たちの姿を褒めたりしたことで、子供たちは、満足感や充実感を味わうことができた（キャリアプランニング能力）。なお、これ程までの収穫数を目指したのは、「余った野菜をどうしようかな。」といった問いが子供たちから生まれ、保護者や地域の方に収穫した野菜を現金で販売するお店屋さんを通して、キャリア教育を展開するきっかけとするためである。

資料4 令和5年度と令和6年度の年間を通して栽培した野菜の収穫数

区分	タマネギ	ジャガイモ	サツマイモ	ニンジン	ダイコン
栽培期間	11月～4月	2月～6月	5月～10月	9月～12月	9月～12月
令和5年度	278個	1,746個	447本	558本	253本
令和6年度	412個	2,317個	718本	260本	202本

※タマネギとジャガイモは年中から年長にかけて栽培



資料3「3つの合言葉」のイラスト



写真1 害虫駆除

(4) 「夏野菜の栽培」での実践

令和5年度の4月下旬から7月にかけて夏野菜の栽培では、子供たちは、「たくさんの夏野菜を収穫したい。」といった願いをもち、熱心に栽培活動に取り組んだが、6月下旬に、ミニトマトがカラスの被害に遭った。

そこで、ミニトマトを育てている子供たちが「カラスからミニトマトを守るためにはどうしたらいいのかな。」といった問いをもち、その解決に向け話し合った。

子供たちの考えた作戦は、「カラスが怖がるヘビをつかってミニトマトの根元に置く。」（写真2）と「偽物のミニトマトをつかって、ミニトマトの茎につるす。」の2つであった（課題対応能力）。



写真2 ヘビの設置

しかし、作戦実行後もカラスの被害は続いた。そこで、他のグループの子供たちも「自分たちの夏野菜を守らないといけない。」と考え、全員でカラス除けの作戦を話し合うことにした（人間関係形成・社会形成能力）。

生き物に詳しい子が、「前、幼稚園の隣の人が、田んぼで、偽物の大きい鳥を飛ばして、お米を守っていたよ。」とつぶやいた。そこで、子供たちは、



写真3 鳥づくり

図鑑で鳥の体を調べ、ビニールで鳥をつくり（写真3）夏野菜のそばにある柵に付けてみることにした（課題対応能力）。しかし、カラスの被害を食い止めることはできなかった。そこで、子供たちは、また話し合い、「隣の田んぼの鳥のように動いていないからダメなんだ。」という結論に至った（キャリアプランニング能力）。

7月上旬、子供たちの鳥づくりのヒントになるよう、職員が田んぼの持ち主をお願いして、園で購入した模型の鳥を飛ばさせていただいた。子供たちは、それを見て、模型の鳥には骨があることを知り、鳥に竹ひごで骨格をつくり、七夕会で使ってたっていた笹の先から糸でつるし、鳥が風で動くように改良した（課題対応能力）（写真4）。



写真4 改良した鳥

しかし、カラスによる被害は続いた。ただ、最終的にみんなで食べ切れない程のたくさんの夏野菜を収穫することができたこと、また振り返りの中で、教師が「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」をしたり、夏野菜を守るためにみんなで話し合い、頑張ったことなどを褒めたりしたことで、子供たちは満足感や充実感を味わうことができた（キャリアプランニング能力）。

(5) 「収穫した野菜を販売するお店屋さん」での実践

① ジャガイモとタマネギのお店屋さん

令和6年度の6月は、2,317個のジャガイモ（男爵とメークイン）を収穫した。園で食べたり、1人10個程度、持ち帰ったりしたが、たくさんのジャガイモが余ったことから、子供たちの中に、「余ったジャガイモをどうしようかな。」といった問いが生まれた。

子供たちは、令和5年度の年長児が、「お家の人は、幼稚園のお店で使う紙のお金を持っていない。」という理由で、ジャガイモ（男爵、メークイン、キタカムイ）を3つの店で品種ごと現金で販売した（合計114袋を完売（18,600円））ことを思い出し、「自分たちもお家の人に本物のお金で売ってみたい。」といった願いをもった。また、令和6年度は、カレーパーティーで残ったタマネギも保存していたため、一緒に売ることにした。子供たちは、「ジャガイモとタマネギのお店を開くには、どうしたらいいのかな。」といった問いをもち、スーパーの見学に行った。見学後の話合いで、店は2つとし、各店でジャガイモとタマネギを販売することとした。値段は、店名「こまつやおはる」が、男爵5個100円、メークイン7個100円、タマネギ5個100円、店



写真5 保護者への販売

名「はるぐみすとあしゅっぷ」が、男爵4個200円、メークイン5個100円、タマネギ8個200円で、袋に入れて（2店舗で169袋）、参観会で保護者に販売した（写真5）。結果は、タマネギは完売したがジャガイモが、2店舗で18袋売れ残った（売上は2店舗で20,100円）。振り返りの中で、「値段が高かった。」「売った数が多かった。」などのつぶやきが聞かれた。しかし、教師が、活動時の写真を見せ、「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」をしたり、これまでの頑張りを褒めたりしたことで、残念な気持ちから、満足感や充実感へと変わっていった（キャリアプランニング能力）。

② サツマイモのお店屋さん

令和5年度の10月は、447本のサツマイモ（紅はるか）を収穫した。園で食べたり、1人1本持ち帰ったりしたが、たくさんのサツマイモが余った。子供たちはジャガイモの時のように、「サツマイモをお家の人に本物のお金で売りたい。」といった願いをもった。子供たちは、「サツマイモのお店を開くにはどうしたらいいのかな。」といった問いをもち、スーパーの見学に行った。見学後の話合いで、子供たちは、ジャガイモのときは、3店舗が3つの品種から1つずつ選んで販売したが、今度は品種が1つであるため、店に違

いが無くなってしまうことを心配した。そこで、店ごとにどんな店にするかを考えた。店名「べにはる」は、「全部売れるお店」を目指し、値段を大1本100円、中2本100円と、他の店より安くし、販売数も合計53本と少なくした。店名「こまつべにはるか」は、「買いやすいお店」を目指し、机の上に籠を並べ段差をつけた上に商品を置くことで、お客さんから商品が見えやすいようにした。店名「ほしのべにはるか」は、「きらきらしたかっこいいお店」を目指し、ミラーテープで、店の机や看板などをきれいに装飾した（課題対応能力）。11月の園内バザーで保護者に販売した結果は、3店舗で173本を完売した（9,100円）（キャリアプランニング能力）。

振り返りの中で、「全部売れてよかった。」「頑張ってたよかった。」などのつぶやきが聞かれた。また、教師が活動時の写真を見せ（写真6）「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」をしたり、これまでの頑張りを褒めたりしたことで、子供たちは、満足感や充実感を味わうことができた（キャリアプランニング能力）。しかし、「お家の人だから売れるんだよ。」とつぶやく子供も見



写真6 振り返り

られた。

令和6年度のサツマイモの販売は、前述の通り、6月の参観会でのジャガイモとタマネギの販売で売れ残ったことから園内バザーでの完売を目指し、3店舗で335本を完売した（18,150円）（課題対応能力）。

③ ニンジンとダイコンとサツマイモのお店屋さん

令和6年度の12月は、260本のニンジンと202本のダイコンを収穫した。収穫後、子供たちは、食べたり、持って帰ったりしても余ったら、「おうちのの人に本物のお金で売りたい。」といった願いをもった。教師が、「どうしていつもたくさん売れるのかな。」と投げ掛けると、子供たちは、「お家の人だから。」と答えた。これを機に話合いが進み、願いがこれまでの保護者への販売から地域の方への販売（「お家の人じゃない人に売ってみたい。」）に変わった。また令和6年度は、園内バザーで販売しなかったサツマイモを85本保存していたため、一緒に販売することにした。そして、「ニンジンやダイコン、サツマイモを、お家の人じゃない人にどうやって売ればいいのか。」が、1つ目の問いとなった。

問いの解決に向け、まず販売場所をどこにするか話し合った。「幼稚園の前の道はあまり人が通らない。」「ショッピングセンターは遠いから大変。」などのつぶ

やきが聞かれ、最終的にいつも見学しているスーパーにお願いすることにした。また、「散らしを配りたい。」とつぶやいた子供がいたため、子供がつくった各店の散らしを、100枚印刷し、販売日の6日前にスーパーに行き、訪れた写真7 散らし配りお客さんに配布した（自己理解・自己管理能力）（写真7）。



次に、「どうやって野菜やお店の看板などをスーパーまで運ぼうかな。」が2つめの問いとなった。初めは、「先生に運んでもらう。」と安易に考えていたが、「それでは自分たちのお店じゃなくなる。」と、つぶやいた子供がいたことで、「自分たちで運ぶ。」「もも組さん(年中)に手伝ってもらう。」「先生に運んでもらう。」の3つの方法で運ぶことになった（課題対応能力）。

スーパーでの販売は、始めの30分間は、地域の方のみに販売する時間を設け（写真8）、子供たちの願いが実現するようにした（人間関係形成・社会形成能力）。また、残り写真8 地域の方への販売の20分間で保護者にも販売したことで、2店舗でニンジン21袋、ダイコン99本、サツマイモ17袋を完売した（14,770円）（キャリアプランニング能力）。



園に戻り、振り返りの中で、「お家の人じゃない人に売れた。」「鉢巻をして気合を入れたのがよかった。」などのつぶやきが聞かれた。また、教師が活動時の写真を見せ、「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」をしたり、お店の準備や販売を頑張ったことを褒めたりしたことで、子供たちは、満足感や充実感を味わうことができた（キャリアプランニング能力）。

令和5年度の年長児もスーパーで3店舗開き、「お家の人じゃない人に売ってみたい。」といった願いが実現されるよう、まず地域の方のみに販売し、その後、保護者にも販売した。結果は、合計で、大きいニンジン333本（売れ残り6本）と小さいニンジン20袋、ダイコン122本（売れ残り25本）を販売することができた（11,610円）（キャリアプランニング能力）。

4 成果と今後の課題

「2 研究仮説」に照らし合わせ、卒園児が入学した小学校で、子供たちに生活と学習に関する状況について聞き取り調査を実施した（令和6年6月と令和7年6月に実施）（写真9）。資料5の通り、生活面は、両年度の卒園児のすべてが、「学校生活は楽しい。」と回答したが、学習面では、両年度で3人の子供が「勉強はあまり楽しくない。」と回答した。このうち、令

和5年度の外国籍の2人は、日本語の理解不足が原因であると判断した。また、令和6年度の日本国籍の1人は、授業中、落ち着いて学習に取り組んでいたことから、心配な状況ではないと判断した。



保護者には、文書やメールで、入学後の子

供の様子についてのアンケート調査を実施した（令和6年6月と令和7年6月に実施）。結果は資料6の通りである。

資料5 卒園児への聞き取り調査結果

質問項目	令和5年度卒園児		令和6年度卒園児	
	楽しい	あまり楽しくない	楽しい	あまり楽しくない
学校での生活は楽しいですか。	24	0	14	0
学校での勉強は楽しいですか。	22	2	13	1

資料6 保護者へのアンケート結果

質問項目	令和5年度卒園児				令和6年度卒園児			
	とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	まったく思わない	とてもそう思う	そう思う	あまりそう思わない	まったく思わない
お子さんは、病気や家事都合以外は、元気に通学しています。	15	4	1	0	11	3	0	0
お子さんは、学校での生活を楽しんでいます。	13	7	0	0	10	3	1	0
お子さんは、学校での学習に意欲的に取り組んでいます。	12	8	0	0	9	3	2	0

※令和5年度の回答数は園児数24人に対し20であった。

一部不安を感じている保護者も見られるが、令和5年度の卒園児に、年間の欠席日数が30日以上の子供がいないこと、また令和6年度の卒園児も、1学期の欠席日数が10日以上の子供がいないことから、両年度の卒園児合わせて38人すべてが、入学後の学校生活をスムーズにスタートすることができたと押さえた。

これは、全国の小学校1年生の不登校が年々増加し、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続が喫緊の課題である中、卒園児38人に不登校がいないのは、大きな成果であると考え。その主な要因は、家庭や小学校による子供への支援に他ならないが、「3 研究実践」の(3)から(5)の括弧内に示した基礎的・汎用的能力が、願いや問いの実現や解決に向け試行錯誤する中で育まれ、また、振り返りでの教師の「基礎的・汎用的能力と育まれた力が役立つ話」により、子供たちが小学校生活に自信をもつことができたことも、要因として挙げられるのではないだろうか。つまり、「キャリア教育を通して育まれた基礎的・汎用的能力」と「小学校生活への自信」が、今も子供たちの中に息づき、子供たちの学校生活を支えているのではないかと考える。

今後は、研究の対象を、本研究で実践した3つの活動以外にも広げるとともに、年中におけるキャリア教育の在り方も追究していく。そして、「第4期教育振興基本計画」で推進が謳われている「幼児教育から高等教育まで各学校段階を通じた体系的・系統的なキャリア教育」のうち、「幼児教育段階におけるキャリア教育の在り方」について、さらに研究を深めていきたい。